

UNU-IASによるパートナーシップ活動の成果

ここでは、先に紹介したプロジェクトの取り組みの中から、それぞれの活動内容を紹介する。



和歌山県みなべ町でのワークショップの様子
(提供：今井彩水)

Topic 1

IPSI：里山里海のレジリエンスを理解するための指標のツールキットの作成

UNU-IAS、国連開発計画（UNDP）、地球環境戦略研究機関（IGES）、Biodiversity Internationalという4団体の協働により、社会生態学的生産ランドスケープ・シースケープ（SEPLS、日本では里山里海のこと）のレジリエンスを理解するための指標と、地域で実際に活用してもらうための実践的な手引書を作成した。手引書では、地域住民とその他のステークホルダーによる参加型の評価ワークショップにより、20の指標を用いてディスカッションと採点を行うことで、SEPLSのレジリエンスに影響する要因についての認識を明らかにするアプローチを紹介している。これにより、関係者間のコミュニケーションを活発にし、住民が自ら評価を実施し議論を行うことで、地域の状態に対する住民間の共通理解を高め、地域の問題解決に向けた行動を促進することを目指している。

Topic 2

RCE：グローバルRCE会議を開催

UNU-IASとRCEジョグジャカルタは、2016年11月23日～25日にインドネシア・ジョグジャカルタにて、第10回グローバルRCE会議を開催した。同会議では、SDGsや、「国連ESDの10年」の後継プログラムとしてユネスコが主導で開始したESDに関するグローバル・アクション・プログラム（Global Action Programme on Education for Sustainable Development（GAP））の具体的な貢献について活発な議論が



約30カ国から50以上のRCE、200名以上が参加した。

展開された。また、RCE間の具体的な協働事業の促進に向け、北米および中南米アメリカ、アジア太平洋、アフリカ、ヨーロッパの地域ごとの議論や、生物多様性、持続可能な生産と消費、ユース、気候変動、高等教育などテーマ別の議論が行われた。さらに、RCEの優良事例に対して授与するRCEアワードの表彰が行われ、インドのRCEスリナガルの学校だけでなく、メディアや村の農家や商店を巻き込んだ、コミュニティ全体に対する防災教育に関するプロジェクトなど、10件のプロジェクトが表彰された。GAPの実施に当たっては、ESDに関わるあらゆるステークホルダーを巻きこむアプローチが重要となるため、地域レベルでESD活動を実施するRCEが果たす役割は大きく、今後さらに国際的なESDの枠組みへ貢献することの重要性が確認された。

Topic 3

GEOC: 国際的に重要な機会とテーマを捉えた普及啓発活動

同プロジェクトでは、アウトリーチを軸に国際生物多様性の日を記念したシンポジウム「生物多様性の主流化 一人々と暮らしを支える森里川海」、パリ協定発効を記念するアクション「ACT FOR 1.5°C」、地域からSDGsの実践を議論する「持続可能な地域づくりと企業や自治体のパートナーシップ～SDGsを活かした取組事例～」等、国際テーマに基づき様々なイベントやシンポジウムを市民社会、学術組織、政府、自治体等の協力のもと開催している。これらの活動を通じて、日本国内におけるSDGsや国際テーマの普及啓発活動を行うとともに、SDGsの達成に向けたマルチステークホルダー型のパートナーシップの促進に取り組んでいる。



SDGsの達成に向けた生物多様性と農業の役割について
パネル展示と公開セミナーを同時開催